

甗の観察点

ー長原遺跡で出土した古墳時代中期の資料の検討を基にー

寺井 誠

要旨 甗は、古墳時代中期に朝鮮半島から伝わり、急速に普及する器種のひとつである。筆者は甗の故地に関心があり、本稿では、その故地を探るための基礎作業として、見逃してはならない観察点を提示することとした。具体的には、長原遺跡で出土した5世紀前半代の甗3点を細部まで観察し、土師器に継承されない属性を見出すことによって、朝鮮半島的な要素の抽出を試みた。その結果、①格子・縄文・縦位平行文といったタタキメ、②把手下面の刺突穴、③把手の挿入方法、④把手の位置に施される沈線などの表示、が重要な要素であると判断した。これらは見落とされがちな要素であるものの、従来指摘されていた底部形態や蒸気孔の大きさ・配置と並んで、観察記録し、報告することによって、甗を正しく記録し、故地研究のための基礎資料となると考える。

1. はじめに

甗は、古墳時代中期に朝鮮半島から伝えられ、定着した炊事用品である(註1)。両側に把手があり、底部には蒸気を通すための孔が穿たれていて、下に水を入れた甕などの容器を重ねて加熱することによって穀物などを蒸すことができる。日本列島における本格的な出現は古墳時代中期以降であり、近畿地方などで局所的に出現した後、他地域にも拡がり、各地で地域色を出しながら継承される(杉井健1999)。

さて、筆者は現在、渡来文化の典型例である甗の故地に関心を持っていて、以前、長原・八尾南遺跡出土の出現期の甗について、朝鮮半島の事例と対比しながら故地を模索したことがある(寺井2012)。その結果、忠清南道から全羅北道と特徴を共通する甗が多いことを確認したが、慶尚南道や京畿道の甗に類似するものもあり、さまざまな地域とのつながりがあったことが予想された。こういった研究を各遺跡で蓄積することによって、各地における朝鮮半島とのつながり方の多様性を明らかにすることが期待できる。

ただ、このような地域間交流の基礎となる、朝鮮半島の地域性の把握は、一朝一夕の作業では不可能である。近年の膨大な発掘調査資料を解きほぐしながら、各地における各時期の甗を横並びに見極めるにはまだまだ時間は必要である。加えて、管見によるかぎり、朝鮮半島全体を見渡しての甗の研究は酒井清治氏や呉厚培氏、朴敬信氏の論稿(酒井1998、呉2003、朴2004)以来行われていないようであるが、韓国では各地における土器の研究が精緻になったことにより、資料は発掘調査の件数に

比例して急増し、さまざまな甗が出土している。韓国においては資料が膨大になった段階では、まず各地域の特色を追究することが優先されるべきであることは理解できる。また、韓国の研究者からすると、道単位のような広域の地域単位での土器の違いは常識的なことであり、今更ながら検討課題として取り上げる必要はないのかもしれない。

したがって、韓国の研究者にこの広域的な地域性の研究成果を委ねるのではなく、日本列島における甗の故地を解明するためには、日本の側からの視点、すなわち朝鮮半島全体での地域性や時期的変遷を見据えたうえで、どのような属性が受容され、また受容されなかったのかということを日本の出土資料を対比しながら、朝鮮半島各地の資料を見る必要があるのである。こういう心構えで朝鮮半島の地域性の把握を進めたいと思っている。

今回は、これらの大きな課題を達成するための第一歩として、日本列島で出土している甗についての欠かしてはいけない観察点を、いくつかの具体的資料（主に大阪市平野区长原遺跡）を通じて示したいと思う。このような作業をしようとした動機は、既報告の甗の実測図や報告文で、しばしばこの朝鮮半島的な属性が見落とされているからである。よって、観察で見落とすといけない点を強調し、細部まで詳しく述べるように心掛けたい。

2. 故地解明ための甗の資料的前提

まず、甗の出現・展開時期について注釈することから始めたい。厳密に言うと、甗自体は古墳時代中期に初めて日本列島に登場したのではない。弥生時代には甗の底部に2次的に穿孔したものや、焼成前に底部に孔をあけた鉢形のものがある（例えば、図1-1）。この鉢形のものについても甗と認められるが（杉井1999）、容量が小さく本格的なものではない。

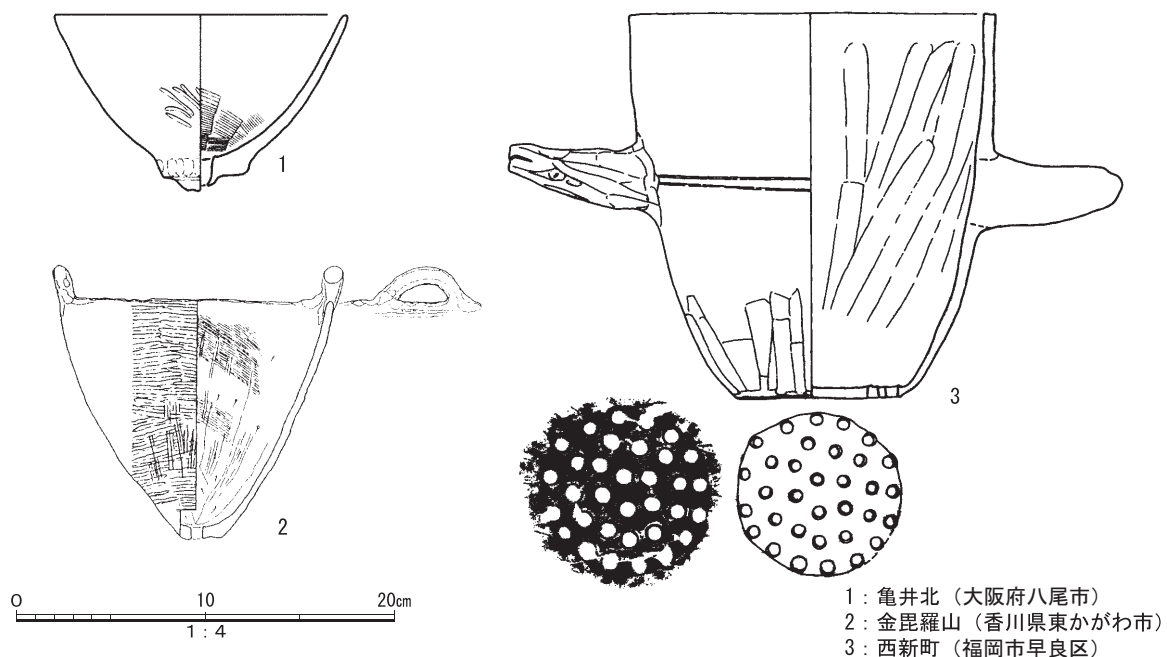


図1 古墳時代前期以前の甗の例

一方、弥生時代後期には四国北東部を中心に、両側に環状の把手をもち、尖がり気味の底部に孔を穿った土器がある（例えば、図 1-2）。この孔から蒸気を通して、「蒸す」ということが可能になったと思われる。把手が中国や楽浪の青銅製の鍔・甗の把手に類似するのに加え、おそらく用途も共通すると思われる点が興味深いものの（寺井 2010）、この特徴的な把手は古墳時代には継承されない。

また、古墳時代前期前葉から中葉の段階では、福岡市早良区の西新町遺跡で多数の朝鮮半島からの搬入土器や竈を有する堅穴建物とともに、かなりの数の甗が出土している（例えば、図 1-3）。これらの甗は、全羅道など朝鮮半島の故地の特徴をよくとどめているものや、在地系の器形や技法が加わっているものもある。興味深いのは、西新町遺跡以外の早良平野や北部九州の同時期の集落ではまったく見られず、西新町遺跡で集落が古墳時代前期後葉には途絶えたと、朝鮮半島系の文化要素は激減し、甗自体も継承されない。

古墳時代中期初め頃には、近畿地方でも甗が登場する。当初は朝鮮半島の故地で作られていた形態や技法がそのまま採用されている。そして、細かい地域差はあるものの、古墳時代後期以降も形を変えながら連続的に継承される。そしてやがては汎日本的に使用される器種となるのである。こういった点で見ると、古墳時代中期に局所的に出現して、いずれは定着する甗は、日本列島の集団が積極的に採用した渡来文化の文化要素のひとつといえるのである。

ここで、本研究で渡来文化研究の対象として甗を取り上げる理由を、以下のように 3 点を列記したいと思う。

- ①古墳時代中期以前には西新町遺跡を除けば、把手を有する専用甗は存在しなかったため、純粋な渡来文化要素として扱うことができる。
- ②上記のように純粋な渡来文化要素であることから、日本列島で採用された場合、朝鮮半島故地の作り方や形態をそのまま踏襲する可能性が高い。
- ③「蒸す」という限定された用途であり、蒸気を通すために底部に孔があけているため、容器に転用されるなど、2 次的な利用が考えにくい。

こういった点から、日本列島で出現した頃の甗には、故地の特徴をよく留めていることが予想され、これを基に地域間交流を解明できる可能性を有するのである。

3. 甗の観察

甗は渡来文化要素ではあるものの、急速に在来文化の中に溶け込み、土師器の一器種となっていく。これは蒸すという新しい調理方式が受容され、日本列島で急速に広がったことを示唆している。いわゆる土師器化した定着型甗（中久保 2009）を比較対照すると、土器としての甗を製作する上で何が「採用されなかった」要素であるのかがはっきりする。

ここで具体的に取り上げるのは、大阪市平野区の長原遺跡出土の 3 点の甗で、煩雑さを避けるためにそれぞれ仮に甗 A、甗 B、甗 C と呼ぶことにする。各甗の出土状況や共伴遺物については報告書の記述に依ることにするが、甗に関しては筆者の観察結果をもとにした記述を行い、報告書と異なる見

解についてはその都度示すことにした。

甗 A は、NG02-8 次調査 SX007 上層の土器集積から出土したものである（図 2：大阪市文化財協会 2005）。ハケ調整が施された長胴の甗や、TG232・ON231・TK73 型式に相当する須恵器などが共伴している。一部の欠損はあるものの、完形に復元できる。頸部はなく、口縁部は直口で、上端は平坦である。胴部には縄文タタキが施され、胴部下半には縦方向のヘラケズリが施される。内面はナデによって仕上げられる。先端が丸い牛角形を呈し、両方の把手の下面には浅い刺突穴が、一方に 1 個所、もう一方に 2 個所残っていた（註 2）。把手は胴部に孔をあけて内側から挿入されていて、胴部の内側には把手の根元の接合痕がよく見える。その大きさは縦 4 cm、横 6 cm 程度の楕円形で、外面で観察される把手の根元の大きさ（縦横とも 4 cm 程度）よりも大きい。また、把手の位置には凹線が 3 条施されているが、おそらく 3 周した結果と思われる。

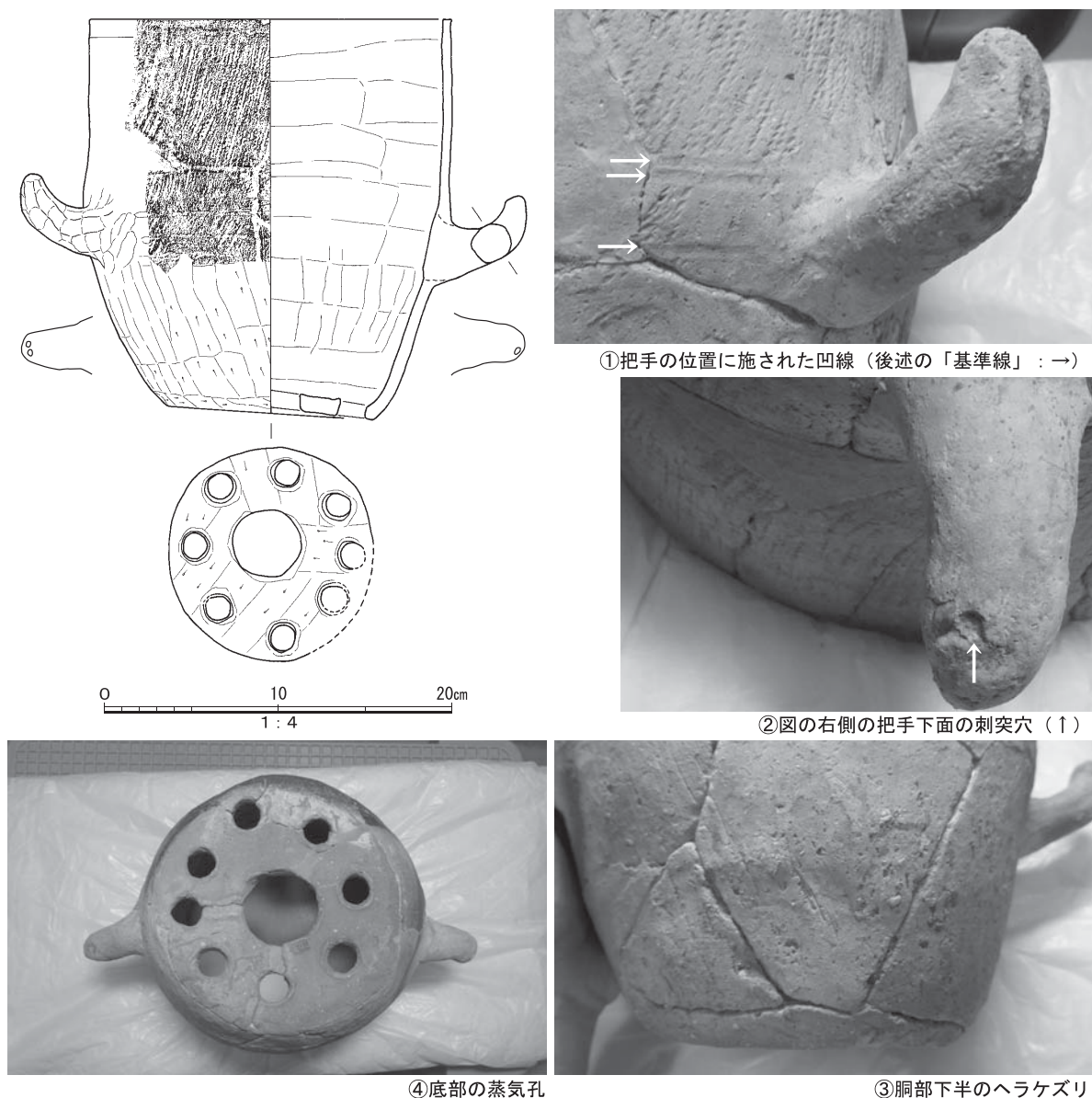


図 2 甗 A (NG02 - 8 次調査) の実測図・細部写真

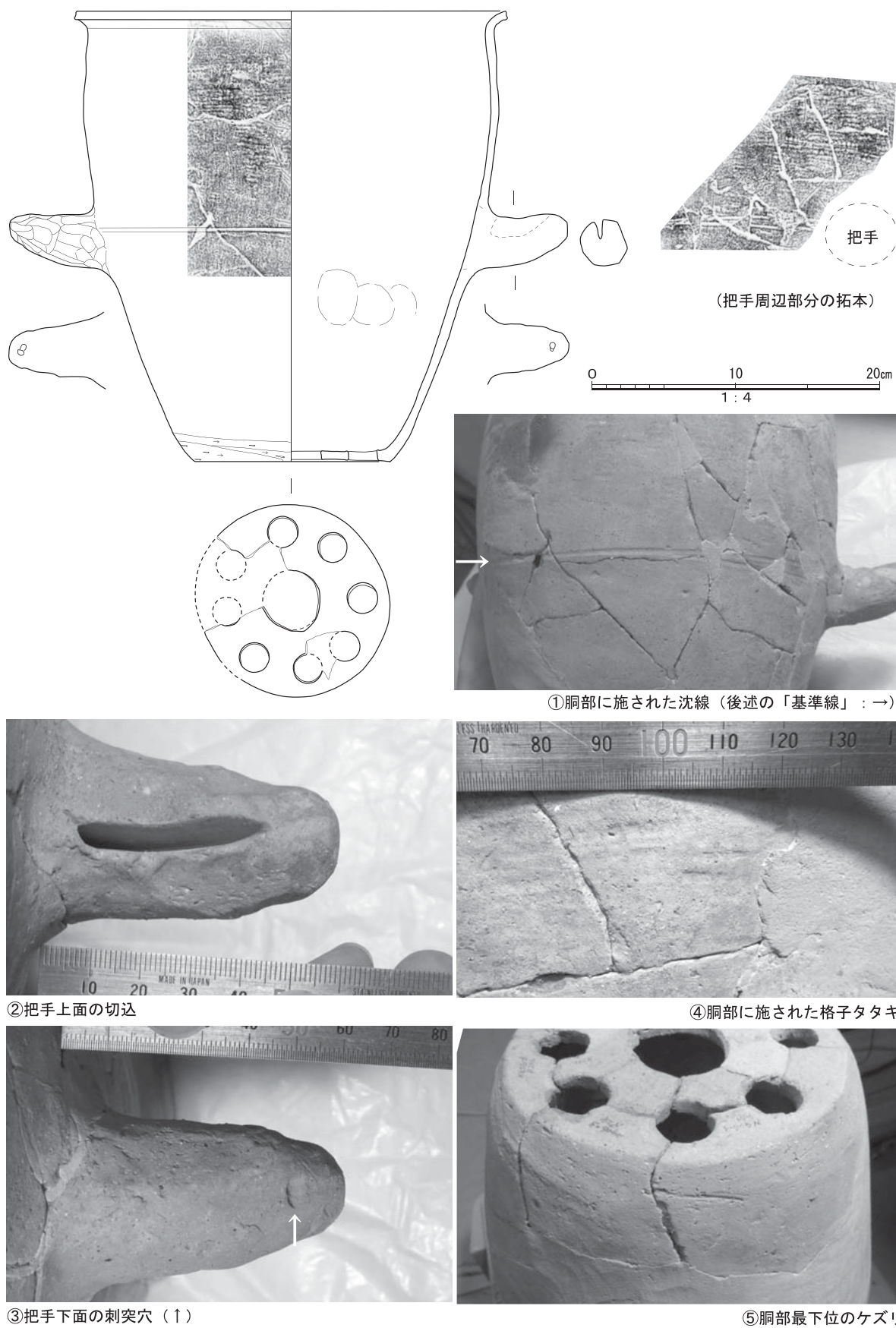
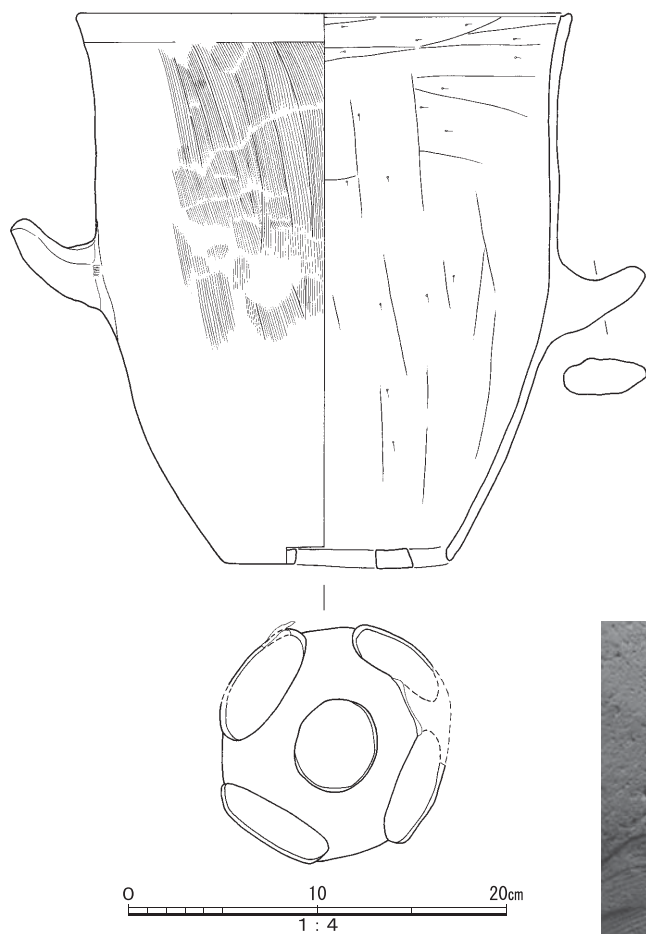


図3 甌 B (NG06 - 3 次調査) の実測図・細部写真



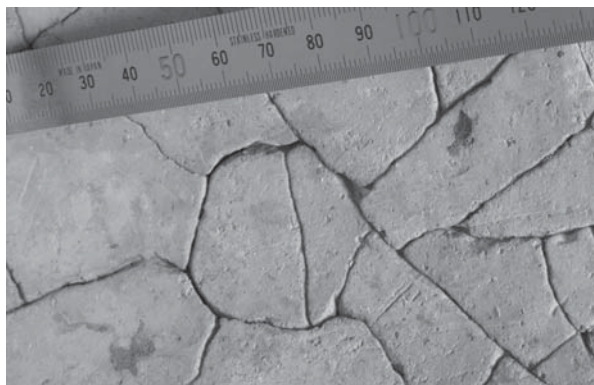
①全体



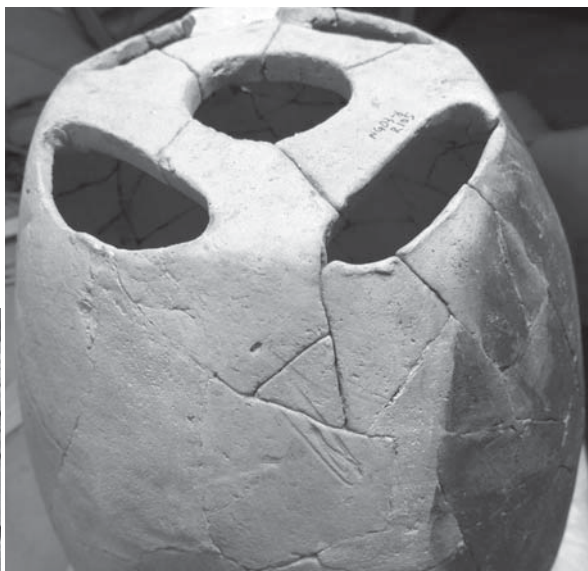
②把手上面



③把手下面



④内面に見られる把手の挿入痕跡



⑤底部と胴部最下位

図4 甗C (NG03 - 6次調査) の実測図・細部写真

甗 B は、NG06-3 次調査盛土遺構 SX714~717 の間を通る溝から出土した（図 3：大阪市文化財協会 2008）。縄文タタキののちに沈線が施された陶質土器や、外面がハケ調整で仕上げられた長胴甗などとともに出土している。口縁部・胴部・底部に一部欠損はあるものの、完形に復元できるものである。口縁部は短く折れて外反し、口縁端部は強いナデによって面をもつ。胴部はやや膨らみながら底部に向かう。胴部には凹部の一辺が 2mm 以下の正方形となる細かい格子タタキが施され、その後縦方向のナデによってタタキメが消されている。よって、報告時の図にある平行タタキメの表現を消去した一方で、拓本を加えたが、タタキメについては写真を併用して提示することにした（註 3）。

また、胴部最下位には横方向のヘラケズリが施されている。底部は平底で、おそらく円板を貼り付けたものと思われるが、接合痕による確認はできない。底部には中央に直径約 4 cm の円孔がひとつ穿たれ、周囲に直径約 2 cm の円孔が 8 つ巡っている。把手は、胴部を切り取った孔に内側から挿入されていて、形状は先端が丸く、断面は棒状を呈する。タタキ・ナデを終えた後に、胴部中位に沈線が巡らされ、その位置に把手が挿入されている。把手には上面に切込、下面に刺突穴がある。なお、図 3 で追記した把手の下面の図には、ナデの表現は省略し、刺突穴の輪郭のみ図示した。

甗 C は、NG03-6 次調査の SD057 が張り出した部分に形成された土器群 B から出土したものである（図 4：大阪市文化財協会 2005）。共伴遺物には土師器高杯や長胴甗などがあるが、SD057 では TG232・ON231・TK73 型式に相当する須恵器が出土している。わずかに欠損があるものの、ほとんど完形である。口縁部は直口で、口縁端部は面をもち、内傾する。胴部はやや膨らみながら底部に移行する。外面にはタテハケが施され、内面はヘラケズリである。胴部と底部の境界ははっきりしていて、底部は平底である。底部には中心に長径 4.8 cm、短径 4.2 cm の楕円形の孔、その周囲に長径 4.5~6.5 cm、短径 2.0~2.7 cm の楕円形の孔が蒸気孔として穿たれている。把手は舌状で先端に丸みがあり、断面は扁平である。上面の切込、下面の刺突穴はなく、胴部には把手の付く位置への沈線も見られない。なお、この把手に対応する内面には把手を挿入した縦 3 cm、横 4 cm 程度の楕円形の痕跡があるが、外面での把手の根元は縦横とも 5 cm 程度ある。内面の挿入痕跡が外面より小さいことから、外側から把手が挿入され、接合されたものと考えられる。

4. 渡来的要素の故地との比較

以上の甗のうち、甗 A・B が朝鮮半島の特徴をよく留めたもの、甗 C が土師器化したものであり、後者は中久保辰夫氏の「定着型甗」に該当するものである（中久保 2009）。以下でそれぞれの属性を取り上げながら、甗の対比を行う。すでに杉井（1994・1999）や中久保（2009）とで指摘されていて、重複する部分が多いが、再度明確にしておきたいと思う。

1) 外面のタタキメ

日本列島と朝鮮半島における酸化焰焼成の土器の大きな違いのひとつが、外面の器面調整である。日本列島の土器のほとんどがハケ調整で仕上げられるが、朝鮮半島においてはタタキメが残されたままのものがほとんどである。そのタタキメはここで取り上げた縄文・格子タタキメと、縦位平行タ

キメでほとんど占められ、地域によってその比率に差がある。また、横位平行タタキメは慶尚南道、鳥足文タタキメは京畿道・忠清道・全羅道に偏するという傾向もある。タタキメは単独では故地を限定することはできないが、良好な手掛かりのひとつであることは確かである。

こういう点で見ると、甔Aの縄文タタキメ、甔Bの格子タタキメは典型的な朝鮮半島的要素と言える。一方、甔Cは外面がハケ調整で仕上げられるが、その前にはタタキが施された痕跡が窺えない。

2) 口頸部

近畿地方に登場した頃の甔は、口縁部が直口のものがほとんどで、長原遺跡で出土した初期の甔も甔Aのように多くは直口である。その意味で甔Bのように頸部と短い口縁部をもつ甔は少ない事例といえることができる。

日本列島に近い側の朝鮮半島の事例を見ると、慶尚道の甔はこのような口頸部を有するが、底部が丸いため、おそらく系統関係はないと思われる。一方、全羅道では直口の甔が多いが、5世紀ごろには少ないながらも短く口縁部が折れる甔が見られるようになる。例えば、図に示した山亭遺跡や仙岩里10号墳の甔(図5-3・4)は、胴部に縦位平行タタキが施される点や大きさが異なるが、蒸気孔の配置や形態が一番よく似ているように思われる。ただ、山亭遺跡の報告書では、全羅道ではあまり見られない形態の甔であると指摘されている(湖南文化財研究院2007、p.204)。

また、口頸部をもち、タタキメを残す甔は、大阪府下では四条畷市の葎屋北遺跡などで出土している。葎屋北遺跡は、長原遺跡など中河内の朝鮮半島系土器を出す遺跡より新しい時期のことが多い。よって、口頸部をもつ甔は直口の甔よりも時期が新しくなる傾向があるかもしれない。これについては、今後の研究で十分検討したいと思う。

甔Cは直口であるが、定着型甔のほとんどが直口のものである。この場合、底部はほとんどが平底である。甔Aのような器形が原型となっていることが推測される。

3) 把手上面の切込

亀田修一氏が早くに指摘しているように、甔Bに見られるような把手上面の切込(亀田氏の「有溝把手」)は日本列島には定着しない朝鮮半島的要素である(亀田2003、p.5)。ただ、同時に氏が指摘しているように、これは5世紀代の甔に見られるものである。4世紀前半頃の西新町遺跡の甔にはこのような特徴は一切見られないが、5世紀代の甔においてもすべてに切込があるわけではない。

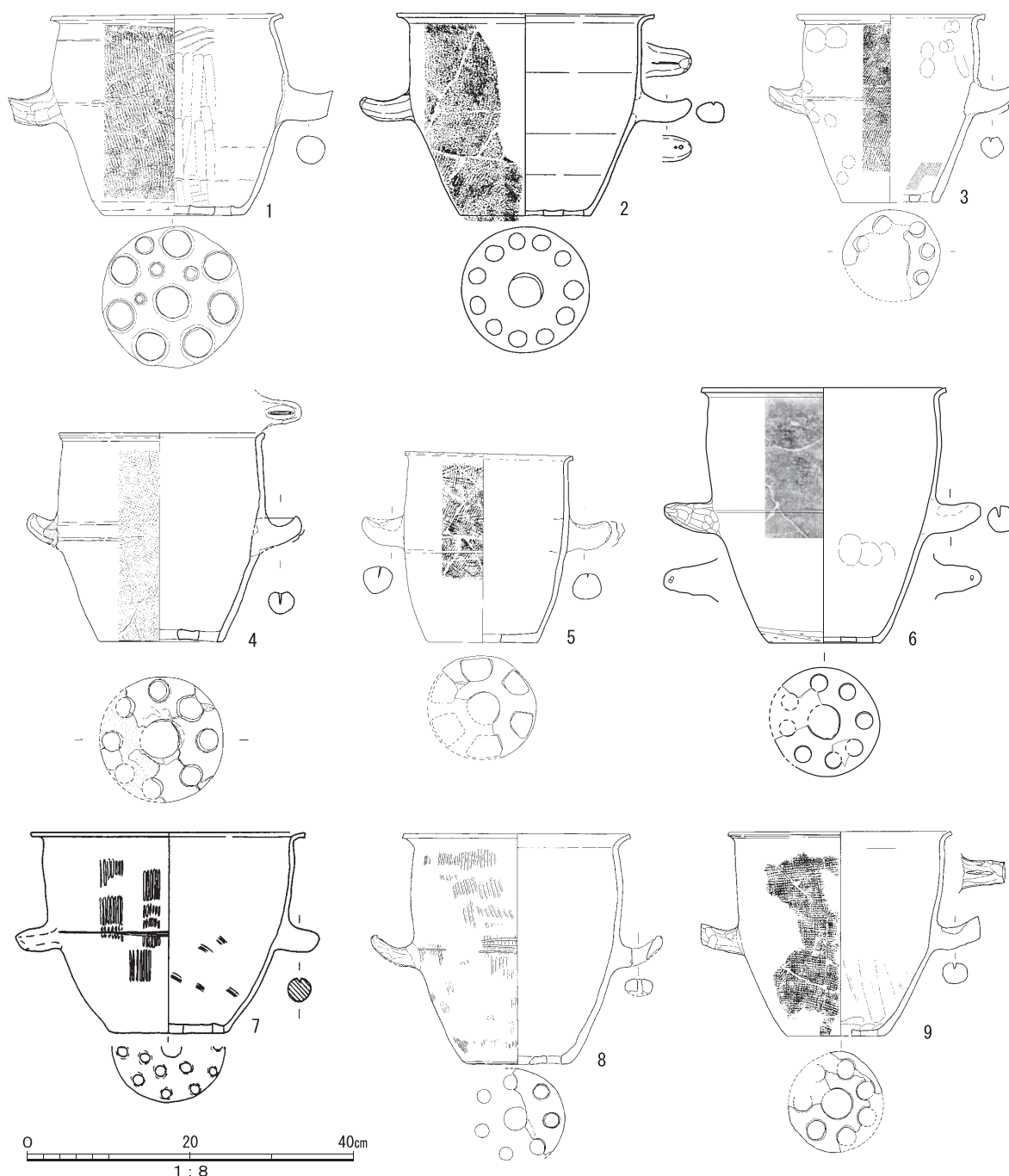
湖南地域(全羅道)の甔を検討した許眞雅氏によると、同地域では5世紀以降に把手に切込が見られるようになり、その登場の背景には漢城百済流域圏からの影響を想定している(許2008、p.121の註9)。許氏の言うような影響関係があったかどうかについては、筆者自身が十分な裏付けを持っていないが、朝鮮半島でも把手の切込の有無は時期差・地域差を示すものかもしれない。

4) 把手下面の刺突穴

把手下面の刺突穴は、甔A・Bで観察できたが、甔Cにはなかった。この刺突穴は直径5mm程度で、把手を取り付けてから乾燥するまでの支えのために竹串や細い竹管のようなものをういたものと推測する。前稿(寺井2012)で朝鮮半島での分布状況を調べたところ、京畿道・忠清道・全羅道では三国

時代以降に見られた一方で、慶尚道では見当たらなかった。製作技法における地域性を反映しているものと予想する。また、しばしば外面がハケ調整の土師器化した甑にもしばしばこの刺突穴が観察されることがあるが、いずれは欠落してゆく要素である。

なお、本研究を進めていくに当たり、既報告の甑を観察したが、この穴があるにもかかわらず、実



- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1: 塙枝洞 (京畿道廣州市) | 5: 徳山里11号墳 (全羅南道羅州市) |
| 2: 葛梅里 (忠清南道牙山市) | 6: 長原 (本稿の甑B) |
| 3: 山亭 (全羅南道長城郡) | 7: 八尾南 (大阪府八尾市) |
| 4: 仙岩洞10号墳 (光州広域市) | 8・9: 都屋北 (大阪府四条畷市) |

図5 口頸部を有する甑の例

測図や報告文に示されていない場合がいくつかあった。図化するうえで漏らしてはならない要素であると考ええる。

さらに、把手の先端の形態についても着目すべき点である。本稿で取り上げた甑 A・B はいずれも先端が丸いが、切り落とされたような面をもつものもあり、このような把手は朝鮮半島では京畿道・忠清道・全羅道といった半島南西部でよく見られるので、故地検討のためには着目すべき点であると考ええる。

5) 把手の基準線とその取り付け方法

韓国各地の報告書を見る限り、把手の位置に沈線や凹線、幅が狭く強いヨコナデが胴部の中位辺りに引かれている甑を多く見る。その位置に把手が付けられることから、同じ位置に両側の把手を付けるための線である。適当な表現ではないかもしれないが、本稿では「基準線」と仮称したいと思う。この線が甑 A・B では施されているが、定着型である甑 C では見られないことから、継承されない要素と想定する。

なお、把手の挿入方向については、朝鮮半島の甑については胴部の器面調整が終わった後に器壁に孔をあけ、内側から把手を挿入している。内側で観察される挿入痕跡が外面の把手根元よりも大きいのが特徴である。筆者が韓国で観察した甑の中には、内側から外側に向かって把手を挿入したために、胴部の器壁が外側に向かって変形している事例をいくつか観察したことがあるし、長原遺跡 NG03-6 次調査の甑の把手でも、縄文タタキされた器面が変形して、把手の根元付近についているのを確認することができた（図6：大阪市文化財協会 2005）。このようにタタキが施された器面が、把手の根元に巻き付くような状態が観察されたら、把手を外側から挿入した痕跡と考えるべきである。

一方、甑 C はその痕跡から、外側から内側に向かって挿入したものと推定する。挿入方法の違いも朝鮮半島の特徴をとどめたものと、定着型甑の相違点といえる。

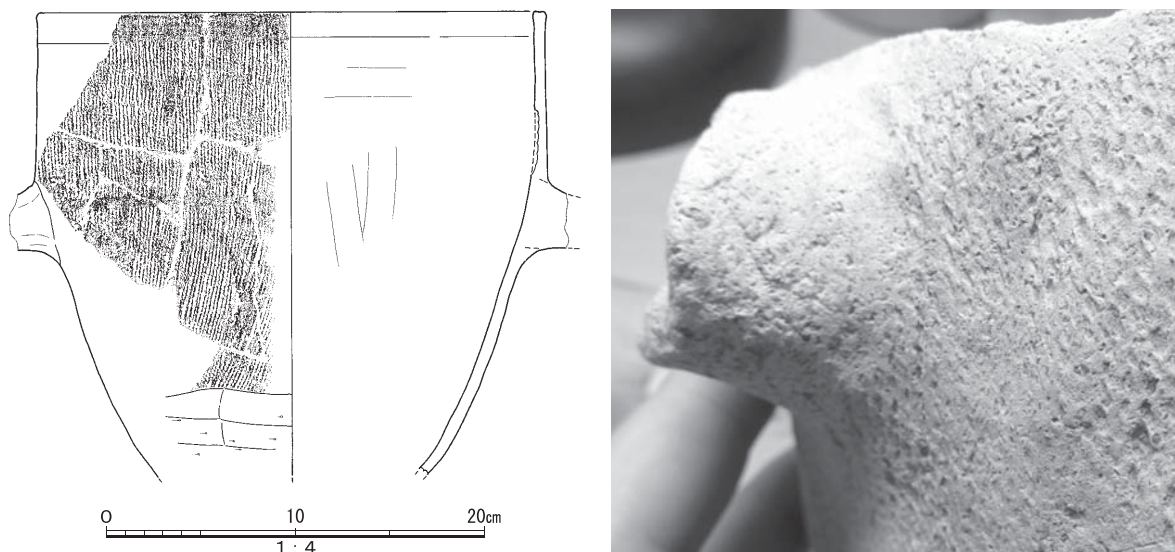


図6 把手の挿入方法がわかる事例（NG03 - 6 次調査の甑）

5. 故地研究についての課題

以上、甌の観察において、看過できない点を具体的資料にそくして記した。甌は在来の伝統がない器種であるため、受容した当初は朝鮮半島での器形や製作技法をそのまま留めている可能性が高い。以下、見落とされがちな観察点を列記したい。

- ①外面のタタキメ
- ②把手下面の刺突穴
- ③把手の挿入方法
- ④把手の位置に施される沈線などの表示

タタキメについては、例えば半島南西部に分布する鳥足文タタキメが施されているなら、故地を推定する手がかりとなる。また、朝鮮半島全体で格子・縄文・縦位平行タタキメが見られるが、時期・地域によってその割合が異なることは留意しておかなければならない。特に筆者の研究で主対象としたい4～5世紀では、全羅道で格子タタキの割合が高いというように、タタキメは大まかに故地を推定することのできる材料となる。また、刺突穴についても、分布が朝鮮半島南西部に偏るため（寺井2012）、故地を反映する属性になる見通しを持つ。

当然、これ以外に底部形態や蒸気孔の形態・配置も故地を考えるうえでは欠かせない点である。底部形態は大まかには朝鮮半島の南西部と南東部でそれぞれ平底と丸底に分けることができる。また、蒸気孔については時期が下るにしたがってひとつひとつの孔が大きくなる傾向にある。平底の甌では、蒸気孔の配置で多いのが中心にひとつと周囲に複数の円孔を巡らすものが多いが、周囲に取り巻く円孔の数が地域や時期によって異なる（寺井2012）。

上記であげた各属性は、どのような相関関係を示すのかということについても調査する必要がある。たとえば、長原遺跡の甌Bについては、朝鮮半島の事例と対比して、短く折れる口頸部と把手の切込には相関関係がありそうである。全羅道の甌の研究では、一般的に口頸部をもつ甌は比較的新しい時期に登場するとされている。例えば、羅州市の徳山洞11号墳のものは、口頸部があるとともに把手上面に切込があり、蒸気孔は大きい。四条畷市の薮屋北遺跡の甌についても、把手に切込がある。相関関係があるとともに、渡来の時期を考える手がかりとなるであろう。

これらの要素は、甌が在地化していく過程で、抜け落ちていくものも多い。その過程を検討するうえでも、朝鮮半島の特徴をよく留めている甌のさまざまな特徴を把握しておく必要があると考える。課題が多く、かつまだ筆者自身が気づいていない点も多いかもしれないが、多くの資料を実見し、情報収集をしながら、少しずつ故地解明に努めたいと思う。

本稿を作成するにあたり、平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C）25370902「日本列島における出現期の甌の故地に関する基礎的研究」）の助成を得た。

註)

- (1) 「甗」は厳密には「甗形土器」と呼ぶべきであるが、本稿では「甗」という呼称を用いることにする。また、広義の甗は弥生時代以来存在するが(杉井1999)、本稿では両側に把手があり、底部に蒸気孔が焼成前に穿たれるものを甗と呼ぶことにする。
- (2) 報告書の実測図には表現されていなかったもので、図2で把手下面を加筆した。
- (3) この甗は、以前の拙稿(寺井2012)でも取り上げた甗である。報告文で「体部外面は横方向のタタキ、内面はナデで整える」とされていて、報告書の実測図でも横方向の平行タタキメの表現があった。筆者もそれをそのまま引用し、韓国の調査事例を見渡してもこのような例がないことから、朝鮮半島的な要素と日本在来の要素が結合した可能性があると考えた。しかし、脱稿後に再度熟覧したところ、タタキメは格子タタキメであり、ナデが施されていることによって一見横位平行タタキメに見えるために、誤って報告されたことを確認した。また、把手については、下面の刺突穴は両方とも観察できたが、報告書の実測図では表現されていなかった。以上の点については、観察不十分なまま報告書の内容を引用して拙稿を仕上げたことによる誤りであり、この場を借りてお詫びし、訂正したいと思う。

参考文献

日本語 (五十音順)

大阪市文化財協会2005、『長原遺跡発掘調査報告XⅡ』

大阪市文化財協会2008、『長原遺跡発掘調査報告XⅦ』

大阪府教育委員会2010、『葦屋北遺跡Ⅰ』

大阪府文化財調査研究センター1999、『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』

香川県埋蔵文化財センター2000、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十六冊 金毘羅山遺跡Ⅰ 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡』

亀田修一2003、「渡来人の考古学」:『七隈史学』第4号 七隈史学会、1-14.

酒井清治1998、「日韓の甗の系譜から見た渡来人」:『植崎彰一先生古希記念論文集』 真陽社、27-38.

杉井健1994、「甗形土器の基礎的研究」:『待兼山論叢』第28号 大阪大学文学部、31-56.

杉井健1999、「甗形土器の地域性」:『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』 大阪大学考古学研究室、383-409.

寺井誠2010、「近畿・瀬戸内における朝鮮半島系土器の様相」:埋蔵文化財研究会編『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に—』、109-130.

寺井誠2012、「長原・八尾南遺跡出土の甗の系譜」:『大阪歴史博物館研究紀要』第10号、19-39.

中久保辰夫2009、「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」:『考古学研究』第56巻第2号 考古学研究会、62-82.

福岡県教育委員会2000、『西新町遺跡Ⅱ』

八尾南遺跡調査会 1981、『八尾南遺跡—大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書』

(韓国語)

京畿文化財団京畿文化財研究院2010、『廣州牆枝洞聚落遺跡』

高麗大学校考古環境研究所2007、『牙山葛梅里(Ⅲ区域)遺跡』

朴敬信2004、「韓半島 中部以南地方 土器시루의 發展過程 (韓半島中部以南地方の土器甗の發展過程)」『崇実史学』第17輯、31-65.

吳厚培2003、「시루의 形式分類와 變遷過程에 關한 試論（甌の形式分類と變遷過程に関する試論）」『湖南考古學報』17 輯、41-82.

全南大学校博物館2002、『羅州德山里古墳群』

許眞雅2008、「호남지역 3~5세기 취사용기의 시공간적 변천양상（湖南地域の3~5世紀の炊事容器の時空間的變遷様相）」：食文化探求会編『炊事の 考古学』 書景文化社、101-138.

湖南文化財研究院2007、「長城山亭遺跡」『光州飛鴉遺跡-長城山亭・永申遺跡-』

湖南文化財研究院2012、『光州仙岩洞遺跡Ⅱ』

図の出典

- 図1 それぞれ下記の図を転載。1：亀井北遺跡（その1）（大阪府八尾市：大阪府文化財調査研究センター1999、図Ⅱ-270-20）／2：金毘羅山遺跡（香川県東かがわ市：香川県埋蔵文化財センター2000、第48図-594）／3：西新町遺跡（福岡市早良区：福岡県教育委員会2000、第57図-9）
- 図2 実測図は大阪市文化財協会（2005）の図107-501に一部加筆。写真はすべて筆者撮影。
- 図3 実測図は大阪市文化財協会（2008）の図78-209を改変。写真はすべて筆者撮影。
- 図4 実測図は大阪市文化財協会（2005）の図230-1304を転載。写真はすべて筆者撮影。
- 図5 実測図は大阪市文化財協会（2005）の図213-1197を転載。写真は筆者撮影。
- 図6 それぞれ下記の図を転載。1：塙枝洞遺跡（京畿道廣州市：京畿文化財研究院2010、図面25-1）、2：葛梅里遺跡（忠清南道牙山市：高麗大学校考古環境研究所2007、図面229-5）、3：山亭遺跡（全羅南道長城郡：湖南文化財研究院2007、図面19-22）、4：仙岩洞10号墳（光州広域市：湖南文化財研究院2012、図面639-2）、5：徳山里11号墳（全羅南道羅州市：全南大学校博物館2002、図面63-5）、6：長原遺跡（本稿の甌B、出典前述）、7：八尾南遺跡（八尾市：八尾南遺跡調査会1981、図58-3）、8・9：葦屋北遺跡（四条畷市：大阪府教育委員会2010、第484図-1および第541図-21）

시루의 관찰점

－나가하라유적에서 출토된 고분시대 중기 자료의 검토를 바탕으로－

테라이 마코토

시루는 일본 고분시대 중기(5세기)에 한반도에서 전래하고, 급격하게 보급한 기종의 하나이다. 필자는 시루의 고지(故地)에 관심이 있어, 본고에서는 그 고지를 찾기 위한 기초 작업으로서 간과해서는 안 관찰점을 제시했다. 구체적으로는 나가하라(長原)유적에서 출토된 5세기 전반대의 시루 3점을 세부까지 관찰하고 상속되지 않는 속성을 발견하여 한반도 요소의 추출을 시도했다. 그 결과 ①격자・승문・평행등의 다날문, ②바수 하면의 구멍이, ③바수의 삽입방법, ④바수의 위치에 베풀어지는 심선등의 표시가 중요한 요소이고 판단했다. 이들은 간과하기 쉬운 요소이지만, 종래 지적된 바닥형태나 구멍이의 크기・배치와 함께, 관찰 기록하고 보고하여 시루를 제대로 기록하고 고지 연구를 위한 기초자료가 될 것으로 생각한다.